

ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)			訪問国	英国
学校名	静岡県立富士高等学校	氏名	齋下 日和	学年	高校2年

私は「演劇は最強のコミュニケーションツールだ」という持論を持っている。小学校4年生のときから私は地元富士市の市民ミュージカルにキャストとして参加するようになった。同じ場面を演じるとしても、役者によって演じ方は少しずつ違う。その違いを生み出すのは個々の経験からなる価値観であり、芝居を作る上では役者同士、演出家、裏方、観客の間で互いの価値観を知ることができると感じたためだ。しかし、日本人は「空気を読む」「遠慮」といった風潮のもと、自己表現が希薄で互いの内面をよく知らないまま意図せず相手を傷つけてしまうことも多いだろう。ここで私は「演劇教育」とそれにおいて長い歴史を持つ英国に目をつけた。英国では演劇を学校の授業で学ぶことで、舞台に立つことが人々に身近にある環境であると仮定して、「演劇が身近にある環境で形成されるコミュニティでは、お互いに自己表現やコミュニケーションをどのように行っているのか」という問いのもと英国での探究活動を行った。

滞在形態はホームステイで、平日の午前中は語学学校で英語の授業を受け、平日の午後や休日で探究活動を進めた。行った探究活動は主に4つである。

1. アンケート 英国と日本で同じアンケートを行った。英国では語学学校で同じクラスだった生徒やホームステイ先近くの公園にいた親子連れ、演劇学校の体験授業（合計18人）に、日本では学校のクラスメイトや所属している演劇部の部員に回答してもらった。意外な結果となったのは、「演劇の授業を受けたことがあるか」という問いに対して「ある(55%)」「ない(45%)」と割合が近くなった点だ。演劇の授業が選択制になっている学校もある可能性があること、英国が多様なルーツを持つ人々が生活する国であることが理由として予想される。日本との比較で興味深いのは、「人前で自分の意見を言うのが好きか」を5段階で評価する質問に対し、英国の演劇教育経験者の方が日本人より平均が高評価であった。演劇教育を通して、上手くできるかに関わらず自分の意見を発信することの大切さを理解することができているのだと思う。

2. 観劇 日本との公演の形態の違いを調査した。日本の公演と大きく違ったのは、客席で飲食ができる点、観客が積極的に大きいリアクションをとっている点、ルーツによる見た目の違い（肌の色など）を無視して配役され様々な人種の人々が1つの舞台に立っている点である。客席で劇の邪魔をしないように静かに観なければならないという堅い雰囲気は保たれている日本の劇場に対して、英国の劇場では、演劇の授業を経験している人がいたり客席での飲食が認められていたりして日本より軽い雰囲気ができているため、観客の素直なリアクションが引き出され、より劇場の一体感や物語世界への没入感を感じた。また、様々な肌や髪の色役者が

写真1



写真2



1つの作品を作っている様子は、多文化共生社会・違いを認め合う理想的な社会のロールモデルとして特に子どもたちに良い影響を与えられると感じた。(写真1：客席で休憩時間にアイスクリームを食べることができる)

3. シアターツアー シアターツアーとは、観劇を目的とせず客席や舞台裏を案内しながら劇場の歴史や舞台装置についての説明を受けられる劇場での取り組みである。役者や裏方の稽古中の様子も見ることができた。様々な国の言語に対応したパンフレットが用意されるなど海外からの旅行者への工夫、スタッフ2人による劇仕立ての紹介など参加者が楽しく学べる工夫があり、観劇が目的ではなかったが観劇にも興味を持たせる内容であった。(写真2：Shakespeares' s Globe (シェイクスピアのグローブ座) のシアターツアー)

4. 演劇学校の体験授業 演劇学校 Wac Arts の俳優育成コースの半日体験授業に参加した。「俳優とは何か」という問いへの自分なりの答えを発表する活動から始まり、講師や参加者が自分の意見を否定しないという信頼感を得ることができた。その後は身体や表情を動かす活動、台詞を練習して参加者の前で発表する活動を行ったが、最初の活動で作られた温かい雰囲気によって自己表現に対する抵抗感が薄まり積極的に活動に取り組むことができた。

当初仮定していた身近さとは異なるが、観劇が人々にとってポピュラーな活動であったりシアターツアーという取り組みがあったりすること、上記の他にも、公演の直前に余っている客席のチケットを安く買うことができるサービスや子どもたちが遊びで舞台を使える場など演劇に触れる機会が多く(写真3：子供博物館にある子どもたちがなりたい姿を表現するステージ)、日本より演劇が身近な存在であるということがわかった。そして、その環境の中で人々は、「自己表現に楽しさを見出すことができる」「演劇を観たり参加したりすることを通じて違いを認め合った上で協力するコミュニケーションへの姿勢を学んでいる」「舞台作品への理解があり気軽に自分の素直な反応をもとに物語世界に入っていくことができる」という日本人とは異なる姿勢で演劇、自己表現、コミュニケーションと向き合っていることが見てとれた。今後の展望としては、演劇を学ぶこと、参加することの効果をも自分の目で見て実感することができたため、様々な年代の人にとってより有効な演劇ワークショップの形や観劇の形を考え、企画・運営まで行いたい。今の時点では知識や技能が足りないため、高校生のうちは本を読んだり様々なワークショップに参加したりして、大学で演劇を学問として学び演劇の効果をより理論立ててプレゼンできるようにしたり演劇の歴史を学んで世界を演劇の魅力で結びつけるヒントを探したりする。そして、子どもから大人までが演劇を通じて結びつき人間性を磨ける演劇団体を設立したいと考えている。今回の留学は自分の中の演劇への視点を増やすような経験になった一方、演劇の知識や違う言語でも相手に自分の思いを伝えられる表現力や語学力の不足に気がついた。世界中のどのような人に対しても自分の言葉・表現で相手の心を動かせるように、最終目標である「演劇を世界中の人の心の居場所にする」を達成するために、日々の努力と、自分の言葉のもとになる豊かな経験を多く積んでいきたい。

写真3

